

『太平記』(日本古典文学大系) 年表索引稿 (一)

谷 垣 伊 太 雄

本稿は、かつて、嘉部嘉隆氏(本学教授・阪本千秋氏(大阪府立大手前高校教諭)と『太平記』の輪読をしていた際に筆者が作成した『太平記年表』に修正・加筆したものである。

その後、山下宏明氏の校注によって新潮日本古典集成に収められた『太平記』(全五冊・昭和五十五年五月現在、第二冊―十五巻まで刊行)にも、史実との比較欄を含む詳細な「太平記年表」が付載されており、本稿を活字化する事に躊躇も感じたが、古典大系本の『太平記』の利用の便宜を考えて、印刷する事とした。

なお、本稿では、『太平記』の本筋から派生した記事の中に出て

くる年号(たとえば、巻十六「日本朝敵事」における「天平四年」△101頁△など)とか、中国故事の中に出てくる年号などについては、省いた。また、史実とのズレ等は問題になる点であるが、煩雑さを避けるために、テキストとした日本古典文学大系の頭註などを記するにとどめた。この大系本は、第一冊に巻一―十二、第二冊に巻十三―二十五、第三冊に巻二十六―四十を収めているが、巻数によって頁数の見当がつくので、分冊の数字は付記しなかった。

本来なら、全巻をまとめて載せるべきであるが、紙幅の都合上、本稿では巻十六までとした。△注▽

巻 頁		年	月 日	事 記
1	38	元亨元年	夏	大飢饉あり。その際、後醍醐帝は窮民を救済する。
	39	文保2年	8月3日	藤原禊子(西園寺実兼の娘)、後醍醐天皇の后妃となる。
	42	元亨2年	春	春頃から「中宮(禊子)懐妊ノ御祈」と称して、関東調伏の御祈りが行なわれた。

1

49

元徳元年

9月19日

卯刻、六波羅勢集結する(小串範行・山本時綱ら、土岐・多治見を討つ)。「正中の変」

2																1			
85	83	83	83	82	82	82	74	69	67	65	64	63	61	59	58	54	54	53	49
		其年		同年	元弘元年	嘉暦2年				同		同年			元徳2年				元徳元年
(52日)	8月24日	8月22日	同 7日	7月3日		春	5月29日	7月26日	7月11日	7月13日	6月24日	6月8日	5月11日	同月27日	2月4日	7月7日	同27日	5月10日	9月19日
京都を脱出した後醍醐天皇が「古津石地藏ヲ過サセ玉ヒケル時、夜ハ早若タト明ニケリ」	「夜ニ入テ、大塔宮ヨル潜ニ御使ヲ以テ主上ヘ」意見を具申。後醍醐天皇、内裏を出る。	「東使兩人三千餘騎ニテ上洛スト聞ヘシカバ」近国の軍勢、京都に集まる。	「西ノ刻ニ地震有テ、富士ノ絶頂崩ル、事數百丈」	大地震のため紀伊国千里浜の遠干潟が陸地になる。	「比叡山東塔ノ北谷ヨリ兵火出來テ」諸堂焼失する。	「春ノ比、南都大乘院禪師房ト六方の大衆ト、確執の事有テ合戦ニ及ブ」	「暮程」に牢から出された資朝、佐渡にて斬られる。	俊基、鎌倉に到着。	俊基、再び六波羅に召し捕らえられる。	三人の僧達の遠流地決定する。	僧達、鎌倉に到着する。	東使、三人の僧を引きつれ、関東ヘ下向。	暁、円観上人・文観僧正・忠円僧正の三人、六波羅に召し捕らえられる。	後醍醐天皇、比叡山へ行幸。	後醍醐天皇、万里小路藤房を召して、「来月八日東大寺興福寺行幸有ベシ」と仰せあり。	乞巧奠の行事なし。後醍醐天皇、北条高時への御告文を吉田冬房に書かせる。	東使、資朝・俊基を引きつれ、鎌倉に到着。	東使（長崎泰光・南条宗直）上洛して、日野資朝・俊基を召し取る。	卯刻、六波羅勢集結する（小串範行・山本時綱ら、土岐・多治見を討つ）。「正中の変」

42	39	
元亨2年	文保2年	
春	8月3日	
春頃から「中宮（禪子）懷妊ノ御祈」と称して、関東調伏の御祈りが行なわれた。	藤原禪子（西園寺実兼の娘、後醍醐天皇の后妃となる）	

3										2							
106	105	105	103	103	100	100	100	99	99	96	92	91	86	86	86	85	85
										元弘元年							
9日晦日	同晦日	9月20日	同13日	同月11日	9月3日	9月2日	(1日)	(1日)	9月1日	8月27日	29日	昨日27日	(25日)	(25日)	(24日)	同27日	翌日26日
夜、陶山・小見山、笠置に先懸け。	関東勢の前陣、美濃・尾張に到着。後陣はまだ高志・二村峠。(29日が晦日、天正本「23日」)。	関東(北条)勢二十万七千六百余騎、鎌倉を出発。	晩景、備後国より早馬到着し、桜山四郎入道挙兵を報告。	河内国よりの早馬、楠正成が天皇方として挙兵した、との報告を伝える。	卯刻、「明レバ九月三日ノ卯刻ニ、東西南北ノ寄手、相近テ時ヲ作ル。」	宇治に集結していた幕府勢、笠置に出発。	「昨日ノ合戦ニ、官軍打勝ヌ」(高橋の軍勢を笠置側が撃退したこと)。	余騎で笠置へ攻め寄せる。	「既ニ明日二日巳刻に押寄テ、矢合可有ト定メタリケル其前ノ日」高橋又四郎は拔懸けして、一族三百	六波羅勢、宇治にて十万余騎が参集	後醍醐天皇、笠置寺へ臨幸し、本堂を皇居とする。(諸書により伝えが違うが8月27日が正しいか)	巳刻に後伏見上皇ら六条殿から六波羅北庁へ御幸。	「明日ハ六波羅へ被レ寄ベキ由評定アリ」と告げる。これにより六波羅勢、叡山に発向する。	比叡山浄林房阿闍梨豪誓から六波羅への使者「今夜ノ寅ノ刻ニ、主上山門ヲ御憑有テ臨幸成リタル」	「夜明ケレバ東使兩人内裏へ参テ、先ツ行幸ヲ六波羅へ成奉ント打立ケル處ニ」浄林房より使者来る。	夜、尹師賢、臨幸と称して比叡山に登る。主上の臨幸と聞き、三千の衆徒参集する。	後醍醐天皇、「潛幸ノ儀式ヲ引ツクロヒ」笠置の石室へ臨幸。

106	9日晦日	夜、陶山・小見山、笠置に先懸け。
105	同晦日	関東勢の前陣、美濃・尾張に到着。後陣はまだ高志・二村峠。(29日が晦日、天正本「23日」)。

— 38 —

8				7				6									
254	248	244	242	242	241	240	240	236	232	231	229	228	226	226	222	210	210
去3月12日	(3月12日)	3月12日	同 11日		3月10日	同 28日	同 11日	閏2月5日	同 29日	(24日)	3月23日	閏2月下旬	後2月4日	其翌日	2月11日	同 18日	元弘3年 正月16日
「去三月十二日ノ合戦ニ赤松打負テ、山崎を指テ落行シヲ」追わなかつたため、赤松は勢を立て直す。	光厳天皇(後伏見上皇・花園法皇らも)、六波羅に臨幸。	申刻、京都へ攻め寄せた赤松勢は「申刻計ニ、淀・赤井・山崎・西岡邊三十余箇所ニ火ヲ懸タリ。」	赤松勢三千余騎で六波羅勢を攻め、破る。	晴れるのを待つ。	「六波羅勢、既ニ瀬河ニ着ヌ」と聞いた赤松は「合戦ハ明日ニテゾ有ンズラン」と、少し油断し、雨の	六波羅勢、更に一万余騎が摩耶城へ。	卯刻、六波羅勢、摩耶城の南麓より攻め寄せる。「7日」「3月1日」「1日」とする本あり。	六波羅勢、京都を出発し、摩耶城(赤松)にむかう。	隠岐判官(佐々木清高)ら、船上山(後醍醐・名和長年)を攻める。	「夜モ己ニ明ケレバ」、後醍醐天皇、千波湊より商人船で脱出。	「月待程ノ暗キ夜ニ」後醍醐天皇は隠岐の御所を脱出。「閏2月24日」が正しい。	隠岐で警固中の佐々木義綱、後醍醐天皇に、島よりの脱出を勧める。	伊予国より早馬到着し、「去月十二日」長門探題が土居・得能に破れた、との報告。	繪旨を受けた新田は喜び、病氣と偽って本国に下る。	大塔宮より新田義貞への令旨(「繪旨ノ文章ニ書レタリ」)。「3月」が正しい。	関東より飛脚到来し、「軍ヲ止テ徒ニ日ヲ送ル事不レ可レ然」と下知あり。	同戦場ニ命ヲ止メ畢ヌ(本間資貞が天王寺石の鳥居の右の柱に歌とともに書き残していた一文)。

9					8														
289	288	283	282	281	281	273	271	268	268	262	261	261	260	257	257	257	256	254	254
元弘3年																			
卯月16日	3月	4月27日	(17日)	4月16日	3月27日	4月9日	(4月8日)	4月8日	4月2日	(4月3日)	去月12日	4月3日	去月12日	28日	27日	来 28日	3月26日	3月15日	去 12日
「中ノ申ナリシカドモ、日吉ノ祭祀モ」なし。	「去ル三月ヨリ(六波羅の)北方ノ館ヲ御所ニシツラヒ」(文義が通じない)。	「四月二十七日ニハ八幡・山崎ノ合戦ト、兼テヨリ被レ定ケレバ」	「足利殿ハ京着ノ翌日ヨリ、伯耆ノ船上ヘ潛ニ使ヲ進セテ、御方ニ可レ参由ヲ被レ申タリ」	足利高氏ら、京都に到着。	足利高氏ら、鎌倉を出発する。	翌日四月九日、京中の軍勢、谷堂に火を放つ。	夕方、「夕陽ニ及デ軍散シケレバ」千種忠頭が本陣に帰って味方の死傷者を調べると七千人を越えた。	卯刻、官軍六波羅へ攻め寄せる。「今日ハ佛生日」なのに合戦を始めた、と「人々舌ヲ翻セリ。」	「第六ノ若宮」上將軍として篠村を出発。	「其日ノ巳刻ヨリ、三方ナガラ同時ニ軍始テ、入替々々責戦フ」	「去月十二日ノ合戦モ、其方ヨリ勝タリシカバ吉例也」(「22日」とする本は誤)。	卯刻、官軍七千余騎を二手に分け、京都へ攻め寄せる。	「去月十二日赤松合戦無レ利シテ引退シ後……」	卯刻、山門側では、「二十八日ノ卯刻ニ、法勝寺ニテ勢撰ヘ可レ有燭タリ」	山門では、大宮前で着到を付けると十万六千余騎となった。	「山門已ニ來廿八日六波羅ヘ可レ寄」と決定。	大塔宮の呼びかけに応え、山門の衆徒、大講堂の庭に会合する。	卯刻、六波羅勢、山崎へ向う。	両六波羅の下知「去十二日ノ合戦ノ體ヲ見ルニ……」

- 41 -

373	5日	「去五日」天狗山伏一人が越後の国中を触れまわったので来援した旨、又、「境を隔タル者ハ、皆明日ノ程ニゾ参着候ハンズラン」と大井田遠江守は申し述べた。
372	同9日	義貞ら武蔵国へ移動、千寿王らも馳せ着く。
371	(9日)	「其日ノ暮程ニ」近国の軍勢参集し、二十万七千余騎となる。
370	同9日	鎌倉で軍評定あり。(新田殿退治ノ沙汰許也)
369	(10日)	「翌日ノ已刻ニ」金沢貞将・桜田貞国、大軍を率いて鎌倉を出発。
368	同11日	「路次ニ兩日逗留有テ、同十一ノ辰刻ニ」金沢らの大軍は武蔵国小手差原に到着。
367	(11日)	「日已ニ暮ケレバ、人馬共ニ疲タリ。軍ハ明日ト約諾シテ」義貞は入間河に陣取る。
366	(12日)	「夜既ニ明ヌレバ」源氏は馬を進め、平家は待ちうけ、対峙した。
365	(?)	「連日數度ノ戰」により、平家は分陪河原に引退き、源氏は久米河に陣取る。
364	(?)	桜田・加治・長崎らが「十二日ノ軍ニ打負テ引退由」鎌倉に伝わった。
363	15日	「夜半許ニ」、高時が重ねて派遣した鎌倉からの十万余騎が分陪河原に到着。
362	15日	「十五日ノ夜未レ明ニ」義貞は敵に新しい軍勢が加わったとは知らず、分陪河原に押し寄せる。
361	(15日)	「其日」引退いた新田勢を追いかけて攻撃していたら、「義貞爰ニテ被レ討給フベカリシヲ」平家(北条方)は追わず「大様ニ憑デ時ヲ移ス」。
360	15日	「晩景ニ」、援軍の三浦義勝勢六千余騎、義貞の陣へ馳参る。
359	(15日)	「義勝昨日(14日)潛ニ人ヲ遣シテ敵ノ陣ヲ見スルニ其將嫡レル事武信君ニ不レ異」。「明日(16日)ノ御合戰ニハ義勝荒手ニテ候ヘバ、一方ノ前ヲ承テ、敵ヲ一當々テ見候ハン」。(三浦義勝のことは)
358	5月16日	「明レバ五月十六ノ寅刻ニ」三浦の大軍、分陪河原へ押寄せる。
357	(16日)	「敵(鎌倉勢)ハ前日(15日)數箇度ノ戰ニ人馬皆疲タリ」。

332	(17日)	鎌倉中の人々は「昨日、一昨日マデ」(P 331)は、負戦の報を聞いてもさほど気にしていなかったが、大手の大將四郎左近太夫入道(高時の弟)が「昨日(16日)晩景ニ」鎌倉に引返した事などを聞き「周章シケル」。
332	5月18日	卯刻、新田勢は勢は「五十余箇所に火ヲ懸テ」鎌倉に押し寄せる。
333	(18日)	「同日ノ已刻ヨリ合戦始テ、終日終夜責戦フ」。
333	(18日)	赤橋盛時「今朝ハ洲崎へ被レ向タリケルガ、此陣ノ軍剛シテ一日一夜ノ其間ニ、六十五度マデ切合タリ。」
334	18日	「十八日ノ晩程ニ」洲崎の赤橋勢の多数の自害等により、「義貞ノ官軍ハ山内マデ」進入した。
335	5月19日	本間山城左衛門は「己五月十九日ノ早旦ニ極楽寺ノ切通ノ軍破レテ敵(義貞勢が)攻入ナンドヘシカバ」
		「是ヲ最後ト」極楽寺坂へ向かう。
336	21日	新田義貞は、大館宗氏が本間に討たれて引き退いたと聞き、「二十一日ノ夜半許ニ」極楽寺坂へ向かう。
336	(21日)	「明行月ニ」義貞が敵陣を見ると、北からも南からも攻め難く見えた。
336	(21日)	「其夜ノ月ノ入方ニ」稻村崎、干上る。
338	(21日)	鎌倉(北条方から、官軍(義貞)方への降人も多く出たため「凡源平威ヲ振ヒ、互ニ天下ヲ争ハン事モ、今日ヲ限リトゾ見ヘタリケル」。
341	21日	「二十一日ノ合戦ニ」奮戦した長崎為基は「其後ハ、生死ヲ不知成ニケリ」。
342	(21日)	大仏貞直ハ「昨日マデ二萬餘騎ニテ、極楽寺ノ切通ヲ支テ防鬪ヒ給ヒケルガ、今朝(21日)ノ濱ノ合戦ニ、三百餘騎に討成レ、大軍の中に駆け入り討死する」。
347	(21日)	安東聖秀(北条方)が自分の館に戻ってみると、「今朝已刻ニ、宿所ハ早焼テ其跡モナシ」。
352	春	「其後盛高此若公(北条時行)ヲ具足シテ、信濃へ落下リ、諏訪ノ祝ヲ憑テ有シガ、建武元年ノ春ノ比、暫關東ヲ劫略シテ、天下ノ大軍ヲ起シ、中前代ノ大將ニ、相摸二郎ト云ハ是ナリ」(2年7月が正)。

328	328	
	5月16日	
(16日)	「明レバ五月十六ノ寅刻ニ」三浦の大軍、分陪河原へ押寄せる。	
	「敵(鎌倉勢)ハ前日(15日)数箇度ノ戦ニ人馬皆疲タリ」。	

(晦日)

		11
388	(承久)	
386	去5月	
386	7月9日	
381	5月17日	
378	5月12日	
376	(25日)	
375	5月25日	
374	5月7日	
372	3月13日	元弘3年
371	6月7日	
370	(6日)	
370	6月6日	
370	6月5日	
369	(晦日)	
369		
<p>「其日赤松入道父子四人、五百餘騎ヲ率シテ」福嚴寺に参向。</p> <p>「其日ノ午刻ニ」新田義貞より高時滅亡の報告が届く。</p> <p>「兵庫ニ一日御逗留有テ、六月二日被レ回瑤輿處ニ」、楠正成、七千余騎で参向。</p> <p>「六月五日ノ暮程」東寺まで臨幸。</p> <p>「翌日六月六日、東寺ヨリ二條ノ内裏へ還幸」。</p> <p>「其日先臨時ノ宣下有テ」足利高氏を治部卿に、直義を左馬頭に任命。</p> <p>九州の菊池・小貳・大伴の許より、朝敵平定の奏聞あり。</p> <p>九州での合戦の顚末。「元弘三年三月十三日ノ卯刻ニ」菊池武時、百五十騎で探題北条英時の館へ攻め寄せる。</p> <p>小貳入道は「五月七日酉六波羅已ニ被責落ニテ」千劍破の寄手も敗退したと聞き、仰天し、探題を討とうと考える。</p> <p>小貳入道は大伴入道とともに、「同五月二十五日ノ午刻ニ」探題の館へ押し寄せる。</p> <p>長門探題北条時直、「九州ノ探題ト一所ニ成シ」としたが、「筑紫ノ探題英時モ、昨日早小貳・大友ガ為ニ被レ亡」たと聞く。</p> <p>平泉寺の衆徒七千余騎、「五月十二日ノ白晝ニ」地頭淡河時治を攻める。</p> <p>越中の守護名越時有のもとに、「五月十七日ノ午刻ニ敵既ニ一萬餘騎ニテ寄ル」との報あり。</p> <p>降人となった阿曾時治ら十五人、阿弥陀峰で誅せらる。</p> <p>佐介貞俊は「去五月ノ初ニ」降参していたが、召し捕らえられ斬られる。</p> <p>「承久ヨリ以來、平氏世ヲ執テ九代、曆數已ニ百六十餘年ニ及ヌレバ、一類天下ニハビコリテ、威ヲ振ヒ勢ヒヲ專ニ」していたが、「同時ニ軍起テ、纔ニ四十三日ノ中ニ」北条氏は皆滅した。</p>		

369	晦日	後醍醐天皇、兵庫の福嚴寺に御坐あり。
369	28日	後醍醐天皇、法華山へ行幸。
367	5月27日	後醍醐天皇、書屋山へ行幸。

	13		12
392	元弘		「先帝重祚之後、正慶ノ年號ハ廢帝ノ改元ナレバトテ被レ棄レ之、本ノ元弘ニ歸サル」
392	2年	夏	「其二年(正しくは3年)ノ夏比、天下一時ニ評定シ」、公家一統の政治となる。
392	同年	6月3日	「同年ノ六月三日、大塔宮志貴ノ毘沙門堂ニ御座有」と聞き、方々より兵が馳せ参ず。
392		同 13日	大塔宮は「同十三日ニ可有御入洛被レ定」ていたが、何故か延引。「合戦ノ御用意アリ」との風評あり。
394		6月17日	大塔宮、志貴を出発。
394		同 23日	大塔宮は「八幡ニ七日御逗留有テ、同二十三日御入洛アリ」。
396		8月3日	「同八月三日ヨリ可有軍勢恩賞沙汰トテ」、洞院実世を上卿として恩賞の処置あり。
397		8月2日	「去七月ノ初ヨリ中宮(禧子)御心煩ハセ給ケルガ、八月二日隠サセ給フ」。(10月6日が正しい)。
397		11月3日	春宮(康仁親王か)崩御。
398	翌年	1月12日	「翌年(建武元年)正月十二日、諸卿議奏シテ」大内裏造宮を奏上。
411	元弘3年	春	「元弘三年(元弘4年)建武元年が正しい」春ノ比、諸国で反逆の乱軍蜂起。間もなく平定される。
417	建武		「建武ノ亂ニ圓心(赤松)俄ニ心替シテ、朝敵ト成シモ、此恨(佐用庄)しか貰えなかつた恩賞の不公平へのトゾ聞ヘシ」。
417	元弘3年	7月	「元弘三年七月ニ改元有テ建武ニ被レ移」。(正しくは「元弘4年正月29日」)。
425	去年	5月	大塔宮と足利尊氏との不和の根元は、「去年ノ五月ニ官軍六波羅ヲ責落シタリシ」時に始まる。
428		3月5日	馬場殿に幽閉された護良親王、二条道平宛に無罪を訴える消息を送る。しかし、奏聞されず。
428		5月3日	護良親王を「直義朝臣ノ方ヘ被レ渡」「鎌倉ヘ下シ奉テ、二階堂ノ谷ニ土籠ヲ塗テゾ置進セケル」。
18		3月11日	八幡の行幸(万里小路藤房は諫言が許容されぬため、行幸に供奉したあと行方をくらます)。
21	元弘		「元弘ノ末」万里小路宣房は、春日社の靈夢通りに従一位となる。

	21	元弘	「元弘ノ鎌倉合戦ノ時」北条時興（高時の弟）は、自害をよそおつて鎌倉を落ち、のち西園寺公宗邸に隠れた。
	22		「或夜政所ノ入道、大納言殿ノ前ニ來テ」勧めたため、西園寺公宗は、時興を京都の大將として軍勢を集める。
	22	(?)	「已ニ明日午刻ニ可レ有臨幸由、被ニ相觸タリケル其夜」、後醍醐天皇は夢の中で「明日ノ行幸ヲバ思召留ラセ給フベシ」との告げを受けた。
	23	(?)	天皇が予定の通り、まず神泉苑に行幸されたところ、「池水俄ニ變ジテ、風不吹白浪岸ヲ打事頻也」そのため、天皇は「去夜ノ夢告ノ、今日ノ池水ノ變ズル態、ゲニモ様アリト思召合テ、聽テ還幸」。早速、公宗らを召し取る軍勢を派遣させる。
	24	(?)	官軍は「公宗卿ト文衡入道トヲ召捕奉テ、夜中ニ京ヘ」帰り、文衡を「夜晝三日マデ」拷問し、謀叛を白状させ、斬首した。
	25	(?)	出雲国に配流と決まった公宗が「明日必配所ヘ赴キ給ベシト、治定有ケル其夜」、連絡を受けた北の方と面会する。
	26	(?)	役人が来て「今夜先伯耆守長年ガ方ヘ渡シ奉テ曉配所ヘ可レ奉レ下」と告げる。
	27	(?)	北の方は「故大納言殿ノ百箇日ニ當リケル日、御産事故無シテ、若君生レサセ玉ヘリ」。
	28	建武	「其後建武ノ亂出來テ、天下將軍ノ代ト成シカバ、此人（公宗の遺児）朝ニ仕ヘテ、西園寺ノ跡ヲ繼給シ、北山ノ右大將實俊卿是也」。
	28	(?)	「彼卿謀叛ノ最初、北野に參籠した木工頭孝重は「七日ニ滿シケル其夜」「故大納言殿滅ビ給フベキ前表ノアリケルヲ」知った。
	31	7月16日	北条時行が鎌倉に迫ったため、足利直義は成良親王を奉じて「七月十六日（23日が正しいか）ノ曉ニ、

	13	
21	18	428
元弘	3月11日	5月3日 徳良親王を「直弼車臣ノ方へ」脱走シ、 「鎌倉へ」シテ、 「二階堂」へ行キ、 「行方」をくらます。
	八幡の行幸（万里小路藤房は諫言が許容されぬため、行幸に供奉したあと行方をくらます）。	
	「元弘ノ末」万里小路宣房は、春日社の靈夢通りに従一位となる。	

一	二
三	四
五	六
七	八
九	十
十一	十二
十三	十四
十五	十六
十七	十八
十九	二十
二十一	二十二
二十三	二十四
二十五	二十六
二十七	二十八
二十九	三十
三十一	三十二
三十三	三十四
三十五	三十六
三十七	三十八
三十九	四十
四十一	四十二
四十三	四十四
四十五	四十六
四十七	四十八
四十九	五十
五十一	五十二
五十三	五十四
五十五	五十六
五十七	五十八
五十九	六十
六十一	六十二
六十三	六十四
六十五	六十六
六十七	六十八
六十九	七十
七十一	七十二
七十三	七十四
七十五	七十六
七十七	七十八
七十九	八十
八十一	八十二
八十三	八十四
八十五	八十六
八十七	八十八
八十九	九十
九十一	九十二
九十三	九十四
九十五	九十六
九十七	九十八
九十九	一百

— 49 —

74	正月7日	將軍(尊氏)八十万騎で「近江國伊岐洲ノ社」にたてこもつた山法師を攻略。
72	正月7日	義貞、内裏より退出して官軍の配置を決める。
72	(建武3年)	
72	(?)	引他は乗替の馬に次々と乗替えて「日ヲ經テ尾張國ニ下著」。
71	(19日)	「改年立歸レ共、内裏ニハ朝拜モナシ」。
71	12月19日	「其日ノ午刻ニ」近江國愛智川の宿に着いたところ、引他の乗る龍馬が病死する。
71	12月19日	「四夷八蛮起り合テ、急ヲ告ル事隙ナカリケレバ」尾張國にいる新田義貞を上洛させるため、勅使として引他九郎が派遣される。「十二月十九日の辰刻ニ」京都を出発。
71	今月12日	「告」。
70	去月27日	「其日ノ酉刻ニ」能登國石動山の衆徒からも使者による報告あり。
70	(12日)	「去月二十七日越中の守護」ら「將軍ノ御教書ヲ以テ、兩國ノ勢ヲ集メ、叛逆ヲ企ル」(衆徒の報告)。
70	12月19日	「今月十二日(2日か)彼逆徒等」國司らの立籠る石動山へ押し寄せ、寺院を全焼させた。(衆徒の報告)。
70	12月19日	「去十二月十九日(参考本は12月9日かとする。11月19日かとも考えられ、史実としては12月29日のことか)ノ夜」久下時重ら丹波で挙兵(碓井の報告)。
70	12月19日	より早馬の報告。
70	(12月12日)	「又翌日(12月12日のことか。史実としては建武3年正月12日とすべきか)ノ午刻ニ」丹波の碓井盛景
70	(28日)	「其夜」熊山城に引き籠っていた官軍方の内藤弥二郎が、佐々木方に内通したため、高德らも敗退。
69	(27日)	(児島の報告)。
69	(28日)	「其翌日」佐々木らの勢、三千余騎となる。(児島の報告)。
69	(28日)	「同二十八日」佐々木らの勢、福山に押し寄せる。(児島の報告)。
69	(28日)	「其夜」熊山城に引き籠っていた官軍方の内藤弥二郎が、佐々木方に内通したため、高德らも敗退。
69	(28日)	(児島の報告)。
69	(28日)	「又翌日(12月12日のことか。史実としては建武3年正月12日とすべきか)ノ午刻ニ」丹波の碓井盛景
69	(28日)	より早馬の報告。
69	(28日)	「去十二月十九日(参考本は12月9日かとする。11月19日かとも考えられ、史実としては12月29日のことか)ノ夜」久下時重ら丹波で挙兵(碓井の報告)。
69	(28日)	「其日ノ酉刻ニ」能登國石動山の衆徒からも使者による報告あり。
69	(28日)	「去月二十七日越中の守護」ら「將軍ノ御教書ヲ以テ、兩國ノ勢ヲ集メ、叛逆ヲ企ル」(衆徒の報告)。
69	(28日)	「今月十二日(2日か)彼逆徒等」國司らの立籠る石動山へ押し寄せ、寺院を全焼させた。(衆徒の報告)。
69	(28日)	「告」。
69	(28日)	「四夷八蛮起り合テ、急ヲ告ル事隙ナカリケレバ」尾張國にいる新田義貞を上洛させるため、勅使として引他九郎が派遣される。「十二月十九日の辰刻ニ」京都を出発。
69	(28日)	「其日ノ午刻ニ」近江國愛智川の宿に着いたところ、引他の乗る龍馬が病死する。
69	(28日)	「改年立歸レ共、内裏ニハ朝拜モナシ」。
69	(28日)	引他は乗替の馬に次々と乗替えて「日ヲ經テ尾張國ニ下著」。
69	(28日)	「其翌日」佐々木らの勢、三千余騎となる。(児島の報告)。
69	(28日)	「同二十八日」佐々木らの勢、福山に押し寄せる。(児島の報告)。
69	(28日)	「其夜」熊山城に引き籠っていた官軍方の内藤弥二郎が、佐々木方に内通したため、高德らも敗退。
69	(28日)	(児島の報告)。
69	(28日)	「又翌日(12月12日のことか。史実としては建武3年正月12日とすべきか)ノ午刻ニ」丹波の碓井盛景
69	(28日)	より早馬の報告。
69	(28日)	「去十二月十九日(参考本は12月9日かとする。11月19日かとも考えられ、史実としては12月29日のことか)ノ夜」久下時重ら丹波で挙兵(碓井の報告)。
69	(28日)	「其日ノ酉刻ニ」能登國石動山の衆徒からも使者による報告あり。
69	(28日)	「去月二十七日越中の守護」ら「將軍ノ御教書ヲ以テ、兩國ノ勢ヲ集メ、叛逆ヲ企ル」(衆徒の報告)。
69	(28日)	「今月十二日(2日か)彼逆徒等」國司らの立籠る石動山へ押し寄せ、寺院を全焼させた。(衆徒の報告)。
69	(28日)	「告」。
69	(28日)	「四夷八蛮起り合テ、急ヲ告ル事隙ナカリケレバ」尾張國にいる新田義貞を上洛させるため、勅使として引他九郎が派遣される。「十二月十九日の辰刻ニ」京都を出発。
69	(28日)	「其日ノ午刻ニ」近江國愛智川の宿に着いたところ、引他の乗る龍馬が病死する。
69	(28日)	「改年立歸レ共、内裏ニハ朝拜モナシ」。
69	(28日)	引他は乗替の馬に次々と乗替えて「日ヲ經テ尾張國ニ下著」。
69	(28日)	「其翌日」佐々木らの勢、三千余騎となる。(児島の報告)。
69	(28日)	「同二十八日」佐々木らの勢、福山に押し寄せる。(児島の報告)。
69	(28日)	「其夜」熊山城に引き籠っていた官軍方の内藤弥二郎が、佐々木方に内通したため、高德らも敗退。
69	(28日)	(児島の報告)。
69	(28日)	「又翌日(12月12日のことか。史実としては建武3年正月12日とすべきか)ノ午刻ニ」丹波の碓井盛景
69	(28日)	より早馬の報告。
69	(28日)	「去十二月十九日(参考本は12月9日かとする。11月19日かとも考えられ、史実としては12月29日のことか)ノ夜」久下時重ら丹波で挙兵(碓井の報告)。
69	(28日)	「其日ノ酉刻ニ」能登國石動山の衆徒からも使者による報告あり。
69	(28日)	「去月二十七日越中の守護」ら「將軍ノ御教書ヲ以テ、兩國ノ勢ヲ集メ、叛逆ヲ企ル」(衆徒の報告)。
69	(28日)	「今月十二日(2日か)彼逆徒等」國司らの立籠る石動山へ押し寄せ、寺院を全焼させた。(衆徒の報告)。
69	(28日)	「告」。
69	(28日)	「四夷八蛮起り合テ、急ヲ告ル事隙ナカリケレバ」尾張國にいる新田義貞を上洛させるため、勅使として引他九郎が派遣される。「十二月十九日の辰刻ニ」京都を出発。
69	(28日)	「其日ノ午刻ニ」近江國愛智川の宿に着いたところ、引他の乗る龍馬が病死する。
69	(28日)	「改年立歸レ共、内裏ニハ朝拜モナシ」。
69	(28日)	引他は乗替の馬に次々と乗替えて「日ヲ經テ尾張國ニ下著」。
69	(28日)	「其翌日」佐々木らの勢、三千余騎となる。(児島の報告)。
69	(28日)	「同二十八日」佐々木らの勢、福山に押し寄せる。(児島の報告)。
69	(28日)	「其夜」熊山城に引き籠っていた官軍方の内藤弥二郎が、佐々木方に内通したため、高德らも敗退。
69	(28日)	(児島の報告)。
69	(28日)	「又翌日(12月12日のことか。史実としては建武3年正月12日とすべきか)ノ午刻ニ」丹波の碓井盛景
69	(28日)	より早馬の報告。
69	(28日)	「去十二月十九日(参考本は12月9日かとする。11月19日かとも考えられ、史実としては12月29日のことか)ノ夜」久下時重ら丹波で挙兵(碓井の報告)。
69	(28日)	「其日ノ酉刻ニ」能登國石動山の衆徒からも使者による報告あり。
69	(28日)	「去月二十七日越中の守護」ら「將軍ノ御教書ヲ以テ、兩國ノ勢ヲ集メ、叛逆ヲ企ル」(衆徒の報告)。
69	(28日)	「今月十二日(2日か)彼逆徒等」國司らの立籠る石動山へ押し寄せ、寺院を全焼させた。(衆徒の報告)。

72	(建武3年)	「改年立歸レ共、内裏ニハ朝拜モナシ」
72	正月7日	義貞、内裏より退出して官軍の配置を決める。
74	正月7日	將軍(尊氏)八十万騎で「近江國伊岐洲ノ社」にたてこもつた山法師を攻略。

[illegible]

		15
107	27日	「兎ニ角ニ延引シテ、今度ノ合戦ハ、廿七日ニソ被レ定ケル」。
107	(21日)	「官軍彌勢ヒヲ得テ翌日ニモ頓テ京都ヘ寄ント議シケル」。
107	(建武3年) 正月20日	大智院宮ら二万余騎、「正月廿日ノ晩景ニ東坂本ニゾ著ニケル」。
106	(建武2年) 12月	「去年(建武2年)十二月(11月が正しい)ニ、一宮關東ニ御下有シ」。
106	正月27日	「正月二十七日合戦事」。
101	正月16日	「建武二年正月十六日合戦事」(13日・27日の記事も混同している)。
94	(?)	「夜既ニ明方ニ成シカバ」頭家・義貞等、三井寺攻めに出發。
94	(?)	細川定禪より京都(尊氏)への報告。「東國ノ大勢坂本ニ著テ、明日(15日?)可レ寄由其間ヘ候。急御勢ヲ被レ添候ヘ」。
94	(?)	待明ス。
94	(?)	舟七百餘騎ニ取乗テ、澳ニ浮テ明ルヲ待。山門の大衆二万余人は「如意越ヲ搦手ニ廻リ」「鳴ヲ静メテ
94	(?)	千葉勢、「マダ宵ヨリ千餘騎ニテ志賀ノ里ニ陣取ル」。
94	(?)	大館ら六千余騎で「夜半ニ坂本ヲ立テ、唐崎ノ濱ニ陣ヲ取ル。戸津・比叡辻・和爾・堅田ノ者共ハ、小
93	(13日)	北畠頭家は、「今夜ノ中ニ志賀・唐崎ノ邊迄打寄テ、未明ニ三井寺ヘ押寄セ」る事を提案。
93	(12日)	「其日」大館幸氏、観音寺(近江・安土)を攻め落とす。
93	正月12日	北畠の奥州勢、近江愛智河の宿に到着。
92	11月	「去年十一月、義貞の関東下向の際、奥州の北畠頭家に「合圖ノ時ヲタガヘズ可三攻合ニ由綸旨ヲ被レ下
		ていた。
		ニ七箇度也」。

114	114	113	113	113	112	112	112	111	111	111	110	110	107	107
(5日)	2月5日	(2日)	2月2日	(29日)	29日	(28日)	(28日)	(27日)	(28日)	(29日)	(27日)	(27日)	(27日)	(27日)
十万余騎は、「其日」摂津国芥河に到着。(尊氏方も派兵)。	頭家・義貞は、十万余騎で京都を出発。	「此時」尊氏は、光厳上皇の院宣をもらうために薬師丸を京都へ送る。	兵庫湊河に落集まった勢より連絡受けて、「二月二日將軍會地ヲ立テ、摂津国に赴く。	「將軍(尊氏)ハ其日丹波ノ篠村ヲ通り、會地」へ敗走。	官軍の「諸大將ハ皆一手ニ成テ、二十九日ノ卯刻ニ、二條河原へ押寄テ」「時ヲソ揚タリケル」。	「官軍宵ヨリ西坂ヲ、リ下テ」、八瀬等に陣取る。	「同日ノ夜半許ニ、楠判官下部共ニ焼松ヲ二三千燃シ連サセテ、小原・鞍馬ノ方ヘソ下シケル」。	楠木正成が仕立てた僧達は、「昨日ノ合戦ニ」新田義貞・北畠顯家・楠木正成らが「被レ討サセ給ヒ候程ニ、孝養ノ爲ニ其尸骸ヲ求候也」と語る。	「同日ノ夜半許ニ、楠判官下部共ニ焼松ヲ二三千燃シ連サセテ、小原・鞍馬ノ方ヘソ下シケル」。	「楠判官山門へ歸テ、翌ノ朝律僧ヲ二十三人作り立テ京ヘ下シ、此彼ノ戰場ニシテ、尸骸ヲソ求サセケル」。	外マデ追靡ケデハ候ベキ」(正成の提案)。	「一日馬ノ足ヲ休メ、明後日ノ程ニ寄セテ、今一アテ手痛ク戦フ程ナラバ、ナドカ敵ヲ十里・二十里ガ外マデ追靡ケデハ候ベキ」(正成の提案)。	「今日御合戦、不慮ニ八方ノ衆ヲ傾クト申セ共サシテ被レ討タル敵モ候ハズ」(楠木正成の発言)。	「今日ハ引返サセ給ヒ候テ、一日馬ノ足ヲ休メ」(正成の提案)。

16										15									
133	132	127	126	125	125	117	117	117	117	115	115	114	114						
					建武3年	延元													
3月4日	3月ノ末	(?)	(?)	(?)	2月8日	2月25日	8日	2月2日	去月晦日	(7日)		7日		2月6日					
義貞発病のため、江田行義ら二千余騎を播磨へ下向させる。「三月四日京ヲ」出発。	新田義貞は勾当内侍の色に迷い「三月ノ末（3月18・19日頃には出発したとする説あり）迄西國下向ノ事（尊氏追討のため）被 _レ 延引 _一 ケル」。	菊池武俊と戦つて敗れた小式妙恵は、「持佛堂へ走入、腹掻斬テ臥ニケリ」。（諸記録では2月29日とする。）	尊氏は宗像の館に入り、「次日」小式妙恵の元へ援軍を依頼する。	尊氏が「筑前國多々良浜ノ湊ニ著給ヒケル日（2月13日又は23日とする本あり）ハ、其勢僅ニ五百人ニモ足ズ」。	「建武三年二月八日（12日又は13日との記録もあり）、尊氏卿兵庫ヲ落給ヒシ」。	「今ノ建武ノ年號ハ公家ノ爲不吉也ケリトテ、二月二十五日（29日、又は3月29日・3月2日とする記録もあり）ニ改元有テ、延元ニ被 _レ 移」。	「同八日義貞朝臣」、豊嶋・打出の合戦に勝つ。	「二月二日（3日・4日とする記録もあり）主上自 _二 山門 _一 還幸」。	「去月晦日（正月二十九日）逆徒（尊氏）都ヲ落シカバ」。	河野ノ名ヲ可 _レ 失ト、機ヲトキ心ヲ勵セリ。	足利方の援軍「サシモ勇メル氣色」もなかったが、官軍方の土居・得能は「今日ノ合戦無 _二 云甲斐 _一 シテハ、着する。」	「同七日（史実は11日か）ノ朝ナギニ」西國より二百余艘の足利方軍勢と三百余騎の天皇方の軍勢が到着する。	「二月六日（史実では10日、11日）ノ巳刻ニ」両軍豊嶋河原で行き合ふ。						

16
133同
6日

江田ら書写山坂本に著く。